

「これは専業主婦、八百屋さんに売っていないような野菜を作っています」

【特集】私とともに生きる家

Case.1 モデル・タレント 林マヤさん

自然と触れ合う時間・ふたりの時間・自分だけの時間 3つの幸せな時間を行き来する暮らし

有機菜園のあるオーガニックライフを目指して守谷へ転居
自宅から車で10分ほど走った場所に「プチシャン」と名付けたオーガニック菜園を持ち、珍しい海外品種の野菜などを育てている林マヤさんご夫妻。
「モデル時代に過激なダイエットをして身体を壊した私を見て、夫のタオスが、「健康に良いものを食べて、身体の内側から元気になって欲しい」と野菜づくりを始めたんです」とマヤさんが言えば、タオスさんは「当初は都内に住んで、借りていたつくばの畑まで通っていました。でも、往復50キロの道のりを、夏場に毎日通うのがたいへんで、それなら畑に近い家を借りよう」と同じ茨

有機菜園のあるオーガニックライフを目指して守谷へ転居

城県の守谷市に引っ越して来たのです。庭として100平米の菜園つきでした」と。さらに、野菜を作っているうちにもっと広い菜園が欲しくなり、今の家に引っ越し、別の場所に休耕農地を借りたのだそうです。
「家の横に菜園があると、食事をしていても飲んでいても、野菜が気になってしまします。その結果、自分の時間を犠牲にしままい、料理作りがおざなりになるのです」とタオスさん。マヤさんも「畑と家が離れたことで、畑にいるときは野菜づくりに集中し、家にいるときは食べることに飲むことに集中できるようになりました」と。その結果、料理のレパートリーも増え、それらを盛りつけるお皿にも凝り始めたのだそう。

【写真右】江戸時代から栽培されている伝統野菜の温海カブ。表面は赤くても、中は真っ白です。
【写真下】カラフルな野菜、多国籍な野菜、伝統野菜など、少量多品種で年間120種類の野菜を作っています。



芸能生活と菜園仕事を両立している林マヤさんと、野菜作りを広めている笛風呂タオスさんご夫妻。田舎生活も都会の感覚も満喫できるのが、都心から程よく離れた守谷だとおっしゃるおふたりの、個性あふれる暮らしを訪ねてみました。



【特集】私とともに生きる家に生きる家



野菜づくりを楽しみたくて引っ越した郊外の家、ビーチハウスに住みたいと改装した米軍ハウス、そして、日本の伝統を後世に伝えたいと有形文化財の家を日本料理屋にしたりと、家は持ち主とともに生きていました。





林マヤさんの部屋は、手作り品や手作りエコグッズであふれています。



【写真1】パッチワークで手ぬぐいを貼り合わせたエコバッグ。
【写真2】動物のフィギュアもペンダントやリングに変身！
【写真3】趣味で集めているマトリョーシカとスノードーム。



プロフィール 林マヤ (はやしまや)

1980年代、ファッションモデルとしてデビュー。パリで世界的に有名なカメラマン、ピーター・リンダバーグ氏と出会い、日本人で初めてフランス版『マリークロール』に登場。パリのコレをはじめ、数々のファッションショー等で活躍する。1990年代には英語とフランス語のワールドポップミュージックアルバム『MAYA』でCDデビュー。『ひるブラ』(NHK)、『エンジョイDIY』(静岡あさひテレビ)、『ありがとっ!』(TVK)などにレギュラー出演するなどタレントとしてテレビ、雑誌、ラジオなど多方面で活躍中。ファッションブランド『MAYAMAYA』もプロデュースしている。

「私の部屋は私の世界。ハートがいっぱいで、夢見る乙女のラブリールーム！」

お気に入りのものを置くとは言わないで、ご夫婦で意見が異なったことはないのでしょうか。マヤさんは「だいたい好みは同じみたい。でも、それぞれの部屋はまったく違うんですよ。私のラブリールームはタオスの趣味じゃないの。それが自分の部屋を持って、自分好みのインテリアを置き、そこで自分だけの時間を過ごすことができるからこそ、ふたりの部屋では仲良くできるのだと思います」

自分の部屋でエコグッズを作るのがほととずる時間だとおっしゃるマヤさん。「穴のあいた靴下とか、着なくなった洋服、リボンなど、使わなくなったお気に入りの物を可愛い袋に入れて集めておくの。そうしていると、あるときパツと、「これであれを作ろう！」って思いつくわけ。特に何かを作る目的で取っておくわけじゃないのよ。計画性はないの。でも、捨てられない物を可愛く取っておくと、それらは可愛く蘇ってくる。捨てられないからって段ボールに入れちゃダメね。段ボールに入れたら捨てられる運命だと思う。可愛く取っておくのが重要な「チロリアンテープで作られたセンス、穴のあいた靴下を使ったクッション、手ぬぐいのエコバッグなど、マヤルームには可愛いエコグッズがあふれています」

それぞれの空間にタイプの違いをお気に入りアイテムを置いて、部屋ごとに雰囲気を変えた林マヤさん・タオスさんご夫妻の家は、個性のある幸せにあふれていました。



インドネシアのダイニングテーブル。



食器はすぐ使えるように片付けられない収納を。



芸楽タレントの林マヤさんと、野菜文化研究家の苗風呂タオスさんご夫妻。

お気に入りのインテリアに囲まれたお気に入りの空間で過ごす幸せ
リビングには、デザインの違う個性的な椅子がそれぞれ並んでいて、棚の取っ手も全て異なった物が付いています。マヤさんは「自分の周りには好きなものだけを置きたいの。細かく言えば、あの家具がイヤだとかあるけど、とんどん好きなものを増やしていけば、小さなことは気にならなくなります。あの棚の取っ手もお気に入りの買って来て、自分で好きな場所につけたのよ！」
バラバラのものをひとつの場所に集めるのは、コーディネートが難しくなってしまうのではないのでしょうか。その疑問にタオスさんは「これはインドネシアのテーブルなんですけど、セットになっている椅子をそのまま使うとアジアテイストになりすぎる。それなら、気に入った椅子を集めれば、自分達らしくなるでしょう。でもコーディネートという面から言えば、金色の椅子はここにあるべきじゃない。だけど、木の色をつけているからいいかって許す。不自然でも理由をつけて許すことがバラバラのものを組み合わせるコツじゃないかな……。あるべきじゃないものがあることによってアクセントになるから」と。マヤさんも「気に入って使うことが一番です。使うことで、角張っていた場所も少しだけすり減って丸くなり、その場所にふさわしくなるような気がします」愛して使っていれば、使い手によって統一性が醸し出されるということなのでしょう。



【写真1】押し入れの中にあるワインセラーの前で。
【写真2】お気に入りの富士山をデザインしたタジン鍋。「普通のタジン鍋じゃつまらないから」とマヤさん。
【写真3】ハートの穴がお気に入りのギターを飾っています。



林マヤさんのブランドウェアもトルソーに掛けてインテリアに。

「インテリアは自分の好みで組み合わせます。愛して使っていけば、私好みに変化するから不思議です」

「私とともに生きる家」Case.2 メロフード オーナー/高橋みえさん

「大好きを集めた手づくりの空間」は、内装に廃材を利用して雰囲気演出

家だけでなく、建っている街にまで惚れ込んで越した米軍ハウス。高橋みえさんはその家を改装し、自宅の一角にカフェをオープンさせました。イメージをスクラップし続けること10年を経て、家の内装を自ら改装し、山に近い入間という街で、南の島のビーチハウスを造り出したのです。



ダイニングに入るとひととき目を引くカラフルなマシュマロカラーのカウンター。店舗のアクセントになっています。



Johnson



Town



ジョンソンタウンとは… 埼玉県入間市にある元米軍ハウスの住宅群とその周辺に立ち並ぶ店舗の通称。白壁の住宅が並び、往年のアメリカの街並みの雰囲気を今に伝えています。

ジョンソンタウンの米軍ハウスを店舗兼自宅として改装。白い木の外壁やテラスに、米軍家族が住んでいた当時の雰囲気を演出しています。

白い内装でひととき映える キッズルームのグリーン壁

旅行好きなフードコーディネーターの高橋みえさんが、南の島に建つビーチハウスに憧れて、ジョンソンタウンに引っ越して来たのは2012年のこと。

「元々この街は、戦後、米軍の駐屯地があった場所で、米軍家族用の建物が建っていました。それをそのまま使っており、私の家も築60年ほどです。『内装が自由にいじれる物件』なので、アーティストやアメリカの街並が好きな若い人が住んでいます」

高橋さんのお気に入りには、吹き抜けの広い空間と、屋外と一体感が得られる広いガラス窓だそうです。

「この家を見たときから、キッズルームの内装は緑色にしようと思っていました」何と、3日間掛けて自ら塗装したのです。

「壁をムラなく塗るのは、想像した以上に大変でした。その分、いい思い出になっています。キッズルームの緑色に合わせて、キッチンやタイルを探したんですよ。タイルを輸入している店をかなり回って、今入れているイタリアのタイルを見つけました」

その他の壁を白に統一することで、グリーンを浮き上がらせることができました。

「テーブルやイスも自分で白く塗って、古く見せるためにヤスリを掛けました。ツヤに統一感を出すため、どんなカラーの場合でも同じ種類のニスを使っています」

視界には常に自分の気に入ったものだけが入るようにしたいという高橋さん。家のテーマ「旅行好きな少女が移り住んだ海辺の家」に合わせて、海岸で拾い集めた流木や貝殻をインテリアにしています。



【写真1】貝殻など海岸で拾い集めてきたものをインテリアに。
【写真2】梁が見える高い天井がお気に入り。
【写真3】カフェの他、料理教室も開催しており、フルーツのカット方法も人気です。



キッズルームのグリーン壁は、この家を見た瞬間にまず考えた色。



【写真4】料理教室で人気の「バトナム風パインセオ」と「生春巻き」のプレート。
【写真5】キッチンのタイルはキッズルームの壁と同じ色。
【写真6】カウンターの上には、様々な国の調味料や食材がディスプレイされています。
【写真7】店舗スペースはビーチハウスのような白い壁と、木製のインテリアで統一されています。



全部の場所が手づくりなので、思い入れがいっぱいです。

マシュマロカラーの天井とカウンターが目をはきまます

店舗スペースでひととき目を引きつけるのが、マシュマロカラーのカウンター。

「ジョンソンタウン内の店が、内装に独特の板を使っているのを見て、ぜひこれを使いたいと思いました。実はこれ、もともと米軍ハウスの外壁に使っていた板を、改装のときに、ジョンソンタウンの社長さんが大切に取っておいたのだそうです」泥だらけだった板を譲り受け、丁寧に洗っていくと、何とマシュマロカラーの塗装が現れました。

「実は、私の主人は大工なんです。だから主人とふたりで、このピンク・グリーン・ホワイトの板をパズルのようにはめていき、どの組み合わせが良いかを考えたんですよ。よく見てください。天井も同じ板を組み合わせて貼りました」陽を受け、雨風にさらされた木には、人工的には作り出せない風合いが漂っています。

「ここにいると、時間が止まったように感じるでしょう」これこそ、時を経た木の演出力なのかもしれません。

2012年11月には念願のカフェもオープン。「内装は完成したので、これからは庭にハーブを植えたいと思っています。料理教室や店の料理に、庭で摘んだハーブが使えれば嬉しい」と夢を語ってくださいました。

Mellow Food
住所：埼玉県入間市東町1-5-6
JOHNSONTOWN 内 1144ハウス
TEL：042-968-5605
営業時間：11:00-18:00 定休日：火
http://www.mellowfood.net/
※料理教室（定員・少人数制）についてはMellowFoodホームページをご覧ください。

Case.3

二木屋主人／小林玖仁男さん

歴史を刻んだ建物に入ると、心が洗われ、日本人であることを改めて自覚します

元々、畳とふすまが入っていた
メインダイニングは、じゅうたんに改装。



「古い家は、毎日が懐かしく、毎日が新しい」とおっしゃる二木屋主人の小林玖仁男さん。始めて訪れたのに、なぜかずっとそこにいたような気がするのも、そのせいかもしれません。



【写真1】店内には犬養毅や渋沢栄一など、直筆の書が飾られています。
【写真2】桃の節句には、庭の池にもおひな様が。
【写真3】二木屋の原点とも言える国際もみからカマド。
【写真4】人形について熱く語る二木屋主人・小林玖仁男さん。
【写真5】世界に誇る和牛の中でも、日本一に輝いた野崎喜久雄氏の「のぎき牛」を料理に使用。
【写真6】高松宮が訪れる際に増築した貴賓室。
【写真7】二木屋には、おひな様のコレクターという側面もあります。

日本国登録有形文化財 会席料理 二木屋
住所：埼玉県さいたま市中央区大戸4-14-2
TEL 048-825-4777 営業時間：10:00-22:00 不定休
<http://www.nikiya.co.jp>

Present
二木屋お食事券を
1名様にプレゼント!
(詳しくは店内をご覧ください)



夜になると、庭にはたいまつが焚かれます。



日本で一番大きいとも言われるひな人形。中央にある金魚鉢と比べても大きい。



政治家達が会合を開いていた40畳の畳の間。

有形文化財の建物を通して
後世に伝えたいのは「日本人の心」

京浜東北線・北浦和駅から歩いて8分ほどの住宅街に、戦前に建てられた、趣のある佇まいの日本料理屋「二木屋」があります。ここは、川口で鋳物業を営み、お米を芯までじっくりと炊きあげる国際もみからカマドで財をなし、後に厚生大臣となった小林英三氏が住まいとしていた建物。それを、英三氏の孫である小林玖仁男さんが、1998年に日本料理屋に仕立て直しました。

小林さんは、「便利な生活を求めて、雨戸や木戸が木からアルミに変わるなど、現代の家は洋風になっています。私は残せるものは残して、本物の和を取り戻そうとしています」

テーブルが並べられている40畳の部屋は、もともと政治家が会合を開いていた部屋。また、家屋唯一の洋室は、徳川慶喜の孫娘と結婚した高松宮が訪れる際に増築された貴賓室です。その中に、犬養毅や渋沢栄一、尾崎行雄などの書が飾られています。

「二木屋を始めて、本当に良いもので古いものは、いつまでも古くならないのだなと思うようになりました。都会の店のようになりリニューアルがいらぬのです。畳替えや障子の張り替えなど、多少の手間さえ覚悟すれば、歴史という時間が、建物に付加価値を与えてくれます。また、歴史ある空間は、調度品が調和するし、生きてきます」

私たちに日本の伝統、様式、文化、美意識を後世に伝える義務があるとおっしゃる小林さん。2002年に国の有形文化財に指定された建物で、日本料理屋を営む理由はここにあったのです。

和食にもおひな様にも
日本人の生活様式が残っています

2013年12月、和食が世界無形文化遺産に登録されました。これは、見た目の美しさによるおもてなしの心、栄養バランスに優れているだけではなく、年中行事と密接に関連するなどの文化的多様性が評価されたのです。

「食に関わる伝統的な日本文化とは、まさに二木屋がこの16年間追い求めてきたものです。季節のこだわり食材を使って料理を作り、歳時の室礼でお客様を迎える。これこそが日本人のおもてなしだと思います」

小林さんが歳時の室礼とおっしゃるように、二木屋には五節供の家としての側面もあります。最も有名な時期は桃の節句。3月3日前後の4日間は、客席数を半分に減らし、お座敷いっぱいにおひな様を飾ります。

「武者人形や張り子人形を飾っても、お客様は『あら、古いのね』としか言いません。でも、なぜかひな人形だけは『きゃー、おひな様！』と歓声をあげるので。芸術というのは知識がなければ観賞できませんが、おひな様は顔やきらびやかな服を眺めればよい。『優しそうな顔』『ちよっと性格がきつそう』など、その人なりの判断で楽しむことができるのです。不思議と、雑に『御』と『様』というふたつの敬称もつきましますね。そんなことで集めていたら、こんなにたくさんになりました」

実はもうひとつ、埼玉県がおひな様の聖地だというのもコレクションの理由。おひな様を通して、埼玉県人の心をも伝えたいのです。

Instance
【実例01】
埼玉県・K邸

1.5坪のシステムバスが
コミュニケーションを変えた！



天井近くに採光窓を取り、吹き抜けにした開放感のあるリビング。

富士住建の家で

叶える夢

家は快適に暮らすためのものではない。そこには、子どもとのコミュニケーションを楽しむ工夫、家を慈しむ想いがたくさん詰まっているのです。

広い吹き抜けと、天井近くの採光窓で開放感を

子どもが3人になり、マンション暮らしでは、家の中で思いきり遊ぶことができないからと、一戸建ての新築を決意なさったKさんご夫妻。下のお子さんふたりが男の子のため、これまでいつも「家の中で走ってはダメ」と言い続けたのだそうです。

奥様は、「とにかく、子ども達がのびのびと育つ家にしたかった」と思いました。そのため、リビングを広くしてあります。他にも、室内が明るくなるようにこだわりました。家族が一番長い時間過ごすリビングを、開放的にしたかったので、吹き抜けを考えました。当初、6畳分を吹き抜けにする予定だったのですが、富士住建さんから「リビングを明るくしたいのであれば、思い切って10畳分を吹き抜けにして、天井近くに採光用の窓をつけた方がいい」との提案がありました。おかげさまで、本当に明るい、開放感のあるリビングになったと思います。

「一戸建てを建てようと思った理由はもうひとつあるそう。」「親として、子ども達に『自分の家での思い出』を作って欲しかったのです。やはり、マンションでは自分達の家という感覚が湧かないですから。もちろん私たちも、自分達の家で子どもと過ごした思い出を作りたいと思いますし……」

広いお風呂は「コミュニケーションの場所」

「富士住建に決めたくっかけは、広いお風呂と大きくて質感のあるキッチンが気に入ったからです」とおっしゃる奥様。「これまでは、家族が二組に分かれて入浴していたのですが、今は全員一緒に入浴しているんですよ。また、この間、子どもの友達遊びに来た時に、広いお風呂を見て、『みんなで一緒にお風呂に入りたい』というので、『それならみんなで入りなさい』というので、7〜8人でワイワイと入りました。今では、うちに遊びに来るときは、子どもが『お風呂に入る？』と聞いているほど。お風呂でテレビを観たり、大騒ぎをしたり、本当に楽しそう。子ども達のコミュニケーションの場所になっているんだなと

思います」その噂はお母さんの間にも広まり、Kさん宅を訪れた際には、皆さんお風呂見学をして行くようです。「広くて良いわねとつらやましがられます。子どもが『テレビを観ているから、お風呂に入らない』と言ったときに、『続きはお風呂で見なさい』と言えることも良かったところですね」

もうひとつの決め手となったキッチンは「設計時は、パントリーを造るスペースがでなくて残念に思っていました。でもいざ、キッチンを使ってみると、収納スペースが多いので、コストコで大量買いしてきたものも、全部片付けてしまっています。パントリーは必要なかったですね」これからも家族のコミュニケーションを大切にしていきたいと語る奥様でした。

Kさんのお住まい

〈所在地〉 埼玉県
〈延床面積〉 19.18㎡ (39.00坪)
1階：72.87㎡ (22.00坪)
2階：56.31㎡ (17.00坪)
〈家族構成〉 ご夫婦+お子様3人



子ども達を眺め、コミュニケーションを取りながら、キッチンで作業ができるので安心。

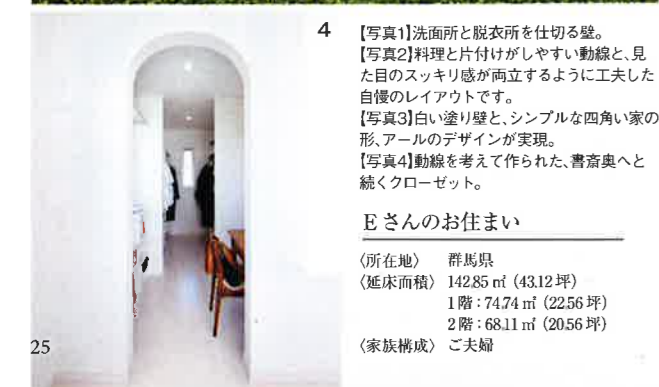


【写真1】収納スペースが多いため、荷物をスッキリと片づけることができるキッチン。
【写真2】1部屋は和室が欲しかった。
【写真3】明るい家にするため、大きい窓を選びました。
【写真4】雨の日でも室内干しができる、便利なスペースもつくりました。

明るくて広いリビングで、子ども達が走り回って遊んでいます。



家の中にアールを多用し、壁やフローリングはどんな家具も似合うよう白にしました。



【写真1】洗面所と脱衣所を仕切る壁。
【写真2】料理と片付けがしやすい動線と、見た目のスッキリ感が両立するように工夫した自慢のレイアウトです。
【写真3】白い塗り壁と、シンプルな四角い家の形。アールのデザインが実現。
【写真4】動線を考えて作られた、書斎奥へと続くクローゼット。

Eさんのお住まい

〈所在地〉 群馬県
〈延床面積〉 142.85㎡ (43.12坪)
1階: 74.74㎡ (22.56坪)
2階: 68.11㎡ (20.56坪)
〈家族構成〉 ご夫婦

Instance
【実例 03】
群馬県・E邸

**動線を考えた家が、
日々の暮らしをサポート**

何より良かったと思うのは、お風呂を使う人と、洗面所とトイレを使う人がはち合わせになつて気まずくならないように、洗面所

「洗面脱衣所に収納スペースを設けたので、お風呂から上がったタオルや着替えをすぐに取り出して使えるので便利です。また、洗濯機もあるので、洗濯後、その場で片付けることもでき、家事の面でも効率が良いです。」

「日々の生活を頭の中でシミュレーションして、収納の位置や部屋の配置を考えて設計しました」と奥様。一番気に入っているのはお風呂と脱衣所、トイレと洗面所の配置です。

**自分スタイルの生活を
より快適にする注文住宅**

徹底的に自分達の動線を考えて、家を建てられたEさんご夫妻。

「白いフローリングにしたらゴミが目立つので、主人はこまめに掃除をしています。それまでは掃除などしたことがなかったのですが、やはり自分で好みの家を作ったから、愛着が強いでしょう。」注文住宅の家だからこそその思い入れもひとしおのようです。

「仕事ではスーツを着るので、書斎の奥にスーツ用のクローゼットを作りました。帰宅すると書斎に鞆を置いて、奥のクローゼットでスーツを脱ぎます。一方、寝室のクローゼットは普段着用。朝起きると、すぐ横のクローゼットで普段着に着替えられます。」
自分達の生活に合わせて設計できるのが、注文住宅の良さだと語る奥様。
「白いフローリングにしたらゴミが目立つので、主人はこまめに掃除をしています。それまでは掃除などしたことがなかったのですが、やはり自分で好みの家を作ったから、愛着が強いでしょう。」注文住宅の家だからこそその思い入れもひとしおのようです。



1 【写真1】お父さんの後を追いかけて、石を登ろうとするお子様。
【写真2】ボルダリングの石が、リビングを華やかに演出しています。
【写真3】「カウンターキッチンなので、いつも子どもの姿を見ていることができる」と奥様。

Yさんのお住まい

〈所在地〉 神奈川県
〈延床面積〉 86.12㎡ (26.00坪)
1階: 43.06㎡ (13.00坪)
2階: 43.06㎡ (13.00坪)
〈家族構成〉 ご夫婦+お子様1人

Instance
【実例 02】
神奈川県・Y邸



白一色の外壁は寂しいと、茶のアクセントカラーを入れました。

**家から始まる、
新しい趣味と、子どもとの絆**

注文住宅だから作りたかったボルダリングのある家
子どもが生まれ、広い家を探していたとおっしゃるYさんご夫妻。
「予算が限られていたので、建売住宅を探していました。たまたま訪れた富士住建のショールームで、予算内で注文住宅が建てられるということが分かり、決心したので」Y邸に入ると、まず目に飛び込んでくるのが、リビング奥のカラフルなボルダリングです。
「せっかく注文住宅で家を建てるのだから、注文住宅でないと作れない家を作りたかったんです。まず、陽当たりが良く、明るく、開放感のある家にしたかったので、リビングに吹き抜けをつけることにしました。そ

の時、主人が、「この吹き抜けを利用してボルダリングを作ろう」と閃いたので。カラフルな石を配置すればデザイン性が生まれるので、見た目も美しいでしょう。子どもの遊び場にもなります」
Y邸を訪れるお客様は、リビングに入ると、まず登ってみるそう。
「大人が登るのを見て、子どもも登るようになりまして。実はそれまで、私たちはまったくボルダリングなどしたことがありませんでした。吹き抜けのスペースがもったいないという理由だけでつけたのです。でも、今では暇があると登っています」
せっかくなので、近所のジムに入って、ボルダリングをやるのかなとおっしゃる奥様。親子の絆が深まったという家づくりは、大成功だったと満足していらっしゃいました。



小屋根収納には、使わない季節の荷物や、お子様の思い出の品を収納しています。